

3 見えないものを見る－胃カメラの映像を教材に－

2つ目の勤務校である桜井小学校も、ずいぶん研究熱心な学校であった。19 クラス、児童数は約 900 人、教職員は校長以下 24 人という学校である。ここでは、教職について4年目から6年目までの3年間を過ごしたが、2年間は最年少の教員であった。

着任するときに送ってきてくださった神末小学校長の「この先生は音楽もできます」が「この先生は音楽ができます」と伝わったらしく、配付された校務分掌表の音楽部のところに私の名前が書かれていた。そして、毎週土曜日の朝に行う全校音楽会の担当者として、全校児童が一堂に会しての斉唱や輪唱、合唱、あるいは全校合奏を指揮し、指導することになっていた。さらに、2年目には鼓笛隊を創設することになり、その指導も私の仕事になった。

この学校に在職中の昭和 37 年、近畿学校視聴覚教育研究大会の開場校を引き受けることになった。視聴覚教材を生かした指導とはいっても、16 ミリや8 ミリ映画、テレビなどを見るためには視聴覚教室に使っていた畳敷きの部屋か理科室に行くのがふつうであり、教室で利用するものといえば、ラジオ、テープレコーダー（それも、極めて重量感のあるオープンリール式のものである）が主であった。まだ、ビデオは一般的なものではなく、録画利用などは思いもよらないときであった。

この大会の受け入れ体制については、運営委員会で論議され、教科等については、社会・理科・音楽・道徳の4つの部を構成し、全職員が取り組むことになった。それまでは音楽部に所属していた私は、その事務を継続しながら、この大会準備に当たっては理科研究部の部長を仰せつかることになった。

最年少の私であるが、理科の指導やそこでの視聴覚教材の活用についてのヒントを求められる立場になり、研究の中心的存在であった中口正夫先生や菊一圭司先生の指導を受けながら、ずいぶん勉強したときであった。

大会当日までには、何度となく校内での研究授業を行った。その1つに、「胃のしくみとはたらき」の授業がある。この学習に使える視聴覚教材には、NHKや毎日放送の理科教育番組、各社の8ミリ映画や16ミリ映画、スライドなどがあつた。しかし、これら市販の教材には物足りないところがあつた。それは、申し合わせたように給食の風景から始まり、歯と唾液のはたらき、食道のしくみとそのぜん動(蠕動)、胃の様子、十二指腸と小腸、大腸…と一連の学習内容が羅列されているシナリオであり、ごていねいに元気に運動する子どもたちで終わっていることであつた。

「胃のしくみとはたらき」の学習には、そのところだけをしっかりと把握できる教材が欲しいと思つた。胃液のはたらきについてはペプシン溶液にタンパク質を浸してその変化を確かめる実験ができる。しかし、「これが胃の様子なんだよ」と見せることは難しい。そんな教室ではできないところだけを手助けしてくれる教材はないのか。そんなことにこだわっていたときに思いついたのが、父が撮ってもらつたという胃カメラのことである。そんなことを家で話していたら、父がフィルムを借りてきてくれた。これは、8ミリ映画のフィルムと同じサイズで、パーフォレーション(フィルムを送るための穴)も同じであつた。早速、映写機にかけてみるとカラーの映像が映し出され、新しい1つの教材として活用することができた。

その後、勤務した中学校でも、「小腸における養分の吸収を理解させる」ことをねらつた教材として、長い理科番組から「揺れ動く柔突

起」の映像だけを取り出し、1分間だけ視聴させたことがある。学習の主体者は児童生徒であり、指導の主体者は教師である。視聴覚教材は、極めて欠陥の多い私たちを援助してくれる教材なのである。こんな考え方で活用したいと思う。

古い木造校舎、不十分な電気系統、そうした中で、ほとんどの学級が一斉に機器を利用することへの対処の1つとして電気工事店の方まで待機してもらったこの大会は無事に終了した。

右の文章は、桜井小学校 100周年記念誌の中

から見つけた、当日の新聞記事である。この中には、私の授業中の写真があった。それは、勤務して5年目の若い教師の姿であった。

「進んだ教育にみんな感心」

―――桜井小で視聴覚教育研究大会―――

近畿学校視聴覚教育研究大会は2日午前9時から桜井小学校で開かれ、2府4県から参加した400人の先生が公開学習を参観、テレビ、テープレコーダー、スライド、16ミリ、8ミリをフルに使った学習に目をみはった。公開学習の各教室は、先生が廊下にあふれていた。



テレビ使用の学習風景